

九州大学附属図書館蔵『たまも』解題と翻刻(上)

天野, ひろみ
九州産業大学 : 非常勤講師

辛島, 正雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

河内, 美香
岡山県玉野市役所 : 職員

坂本, 信道
京都女子大学 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/1518326>

出版情報 : 文献探究. 52, pp.1-16, 2014-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館蔵『たまも』解題と翻刻(上)

解題

本稿で翻刻する九州大学附属図書館に蔵される横型奈良絵本『たまも』(中央図書館 545/タ/9)は、お伽草子『玉藻の草紙』¹の伝本の一つである(以下、九州大学附属図書館蔵『たまも』は九大本と称する)。

九大本は、九州大学附属図書館ホームページの九大コレクションの貴重資料画像において画像データが公開されており、書誌情報などの解説も付されている。²以下に、その解説を引く。

横本(17.8×26.0)袋綴。原表紙、薄茶色無地。題簽は下巻欠。上巻、原題簽(9.3×4.1)丹色、表紙中央に貼付、「たまも 上」と墨書。下巻は表紙に「太摩薄 下終」と墨で打付書き。本文料紙鳥の子。上巻21丁絵7面、下巻19丁絵7面。近衛帝の御代、鳥羽院の仙

天野ひろみ 辛島正雄 河内美香 坂本信道
宮崎裕子 森誠子 梁丹

洞御所に現れた金毛九尾の老狐の化身、玉藻の前の物語を奈良絵本化したもの。室末前期の成立で、物語の前半は才色兼備の玉藻の前の知恵を披露するために諸説話・故事の羅列がなされ、後半は妖狐と化した玉藻の前の退治譚となっている。

『玉藻の草紙』の諸伝本については、松本隆信氏が「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」³において七つの系統に分類し、近年では、川島朋子氏が、松本氏の分類をもとに、その後新たに発見・紹介された伝本を加え、以下のように分類している⁴。

●殺生石説話を持たない系統

- A 根津美術館蔵・絵巻 大二軸(室町)
- 陽明文庫蔵・写本 一冊
- B 赤木文庫旧蔵・写本 半紙本一冊(文明二年)
- C 高安六郎旧蔵・奈良絵本 半紙本三帖

- 国会図書館蔵・奈良絵本 上下合横本一冊
九州大学中央図書館蔵・奈良絵本 横二冊
栃木県立博物館蔵・屏風 一双（絵巻・二軸）
D 京都大学附属図書館蔵・絵巻 大二軸
東洋文庫岩崎文庫蔵・奈良絵本 特大二冊
東京大学史料編纂所島津文庫蔵・奈良絵本 横本二冊
京都大学国語学国文学研究室蔵・写本 横本一冊
E 内閣文庫蔵・写本 大一冊
山岸徳平蔵・写本 大一冊
光慶図書館旧蔵・写本 大一冊
F 京都大学附属図書館蔵・奈良絵本 三冊
昭和女子大学図書館蔵・奈良絵本 三冊
●殺生石説話を持つ系統
G 福島常在院蔵・絵巻 大三軸（室町末）
京都個人蔵・絵巻 三軸（室町末）
矢野利雄蔵・絵巻 大三軸（慶長十一年）
彰考館蔵・写本残欠 大二軸
スペインサー美術館蔵・絵巻 大三軸
サントリ―美術館蔵・絵巻
学習院大学日本語日本文学科学研究室蔵・卷子本 二軸
昭和女子大学図書館蔵・絵巻 二軸（中巻欠）
H 承応二年西田庄兵衛刊絵入大本 二巻（慶應義塾・天理図書
館・東洋文庫・彰考館）
同右菊屋七郎兵衛後印本（国会図書館）

チェスター・ビーティ図書館蔵・奈良絵本 半紙本三冊
京都大学美学美術史学研究室蔵・奈良絵本 二冊
金沢市図書館藤本文庫蔵・写本 二冊

加えて、これまで『上井覚兼日記』の記述からその存在が推察されつつも、確認されていなかった真名本が、伊藤慎吾氏によって発見・報告された。また、臨川書店より二〇一三年十一月に発行された古書目録では、福島常在院所蔵の絵巻の模本と推定される絵巻が掲載されるなど、現在もなお新たな伝本が紹介されている。

当該九大本は、川島氏によって殺生石説話を持たないC系統に分類される「九州大学中央図書館蔵・奈良絵本 横二冊」である。同じC系統の国会図書館蔵の奈良絵本と比較すると、詳細については省略するが、本文は校合が可能な範囲の出入りや異同がある。九大本は、先に述べたように九州大学附属図書館のホームページで画像データが公開されているが、ここにその本文を翻刻し紹介する。

[注]

- 1 『お伽草子事典』徳田和夫編（東京堂出版、二〇〇二年）「玉藻の草紙」は大島由紀夫氏により解説が付されている。
- 2 本稿執筆時（二〇一四年二月現在 <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ia/record/D/411466?it=3&call=x-search>）
- 3 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年）
- 4 川島朋子「『玉藻前』諸本の挿絵をめぐる諸問題」（『奈良絵本絵巻の研究』第三号、二〇〇五年九月）より。引用の際、挿絵を有することを示す。印は省

翻刻

凡例

- 一、九州大学附属図書館蔵『たまも』を底本とした。
- 一、翻刻にあたっては、底本通りを原則とした。そのため、句読点は施さず、濁点も原文のままにした。
- 一、丁数は各丁の最後に「」（ ） という形で示し、表裏は「オ・ウ」と表示した。

堂満も 上 (表表紙題簽)

- 略した。また、『玉藻の草紙』の分類については、熊本弘子「御伽草紙『玉藻草子』の伝本系統について」『古典文学研究(長崎大学)』創刊号(長崎大学古典文学研究会、一九九二年十一月)もある。
- 齋木一馬「上井覚兼日記に就いて」(『日本歴史』八十一号、一九五五年二月)
- 伊藤慎吾「真字本『玉藻の草紙』の意義」(伝承文学研究会 第三八二回東京例会 二〇一〇年一〇月十六日 於学習院女子大学)
- 『古書特選善本目録 奈良絵本・絵巻特集号』通巻二十五号(臨川書店、二〇一三年)
- 福島常在院所蔵の絵巻については、大島由紀夫『玉藻前』諸本をめぐって(一)―常在院本翻刻解題にかえてのメモ―(『伝承文学研究』第三九号、一九九一年)及び同氏『中世衆庶の文芸文化』(三弥井書店、二〇一四年)を参照された。
- 国会図書館本については、『お伽草子一 およしの尼・玉もの前(影印校注古典叢書一六)』(新典社、一九七七年)を参照した。

(文責 森)

とはのみんなのきよう久寿ききう元げん年ねんき
のへいぬせんとうに一人の化女けちよいて
きたれりてんかふさうのひじん
こくちうたい一のけん女なりらん
けいのうちにこうかんあさや
かにしてやうきひのゑむしよ
くをあさけりほうていの
うちにすいしゆこまやかにし
てりふしんのへいしをさら
すいしやうにたき物せされと
もひめもすにたうりのよそ
ほひをほとこすしかれはず

なはちみんの御めちかくめされて
御てうあひきはまりなし」(二才)

「絵」(一ウ)

みんちうの人々たかきもいやしき
も此事を一大しとそしけるを
よそ見る物むゑんのさうを
そなへたるあひたしやうしゆの
やうかうかとうたかひつねにわかう
してふらうのとくをけんする
あひたてん人のけけんかとゑ
いりよおほしめし入れぬ大
しんしよきやうもあやしみをな
すところにゑみをふくみこと
はをやはらかにしてないてんけ
てんせほうふつほういちくくに
かたりけるにすこしもほんせつに
たかはすあまりにふしきさに
此け女に物をとひて見んとお
ほしめしみんのはせ給ふやう」(二才)

そもくしやうけうのなかにほん
なうそくほたいしやうしそくね

はんと申をこしはおこすおも
ひはこれほんなうなりされはいと
はされともほんなうはたらかす
ちきにほたいにいたりねはんを
しようし候へきかたとひたまふに
こたふるやういかてかしり候へき
しかりといへともくわこのこういん
にひかれてなん女のかはりめこそ
候へともしんちうのふつしやうは一
たいの事にて候へはざとりの事
にをいてなん女のふとうあるへ
からすそのゆへはほんなうとほ
たいとしやうしとねほんとはた
とへは水とこほりとのことし」(二ウ)

ひゝきのこゑにたりしかれは
ほんなうすなはちほたいなり
といへとも思ひにまかせてほん
なうをおこせはいよく心にま
かせてちやくしんをなせはしやう
しいよくつくる事なきかゆへ
に身にはかいきやうをまほりて
いきをかさす心にはしやう
しをいとひてひとへにほたい

をおこすへしそのゆへはほんなう
の風あらくふきてほつしやう
のちすいことくこほりと
れともせん心のゑにちたかく
かやくときほんなうのこほり
とけほうかいのみなちすいとな
るこれせんあくの二つにをいて
「(三才)

ふ一ふ異なるゆへなりせけん
のたうそくをけたいにしてしやう
しんせすはかいにしていきをま
ほらすたまくとちやうやうに入て
さいくをしんすいによくすへき
とおもひきさんらの心おこつ
て一ちんもいまたすみやかなら
すまれにふつさうにむかつて
めいあんをかくと月にてらさん
とおもへはちやうやのやみふかし
たとおこるところのほんなう
まうさうめをかけずさんら
の心これなに物そちやうやの
やみこれなに物そまう心身心い
つくよりおこるそとおもひせう
けんし候はねはんのたうりを
「(三ウ)

あらはしたちまちしゆつせのめう
たいをあらはすへきちゑもなく
たう心もなき人のまへにはせ
ほうふつほうへたてありと
みれともたうしんけんこのまへ
には何物もふつほうにあら
すといふ事なしこをもつて
あるひは一しき一かうむひちう
たうともいひあるひはちしやう
さんこうかいしよしつさうふさう
いはひともたんし又はそこん
なんこんかいきたひ一きともあ
かしあるいはせつさうこかいせしん
こんこしゆとうそくかいせみつい
んともときさうさうけんみつ
二けうの中にはいつれもみなしつ
「(四才)

けうなりせほうの中まつたく
しゆつせのほうなしかなしきか
なやけんさいのめのまへのふつ
ほうをしらすほたいとをし
とおもひあはれなるかなや百
身ほとけなりとさとらすむ

なしくをんしやうを期する事
たとへは一しほへたてゝ千里
とおもひしせきへたてゝ萬
里とおもふかことしせけんしゆつ
せの一によにしてまつたくへ
ちの物にあらずたゝさどる
とさとらさるとのしやへつな
りまことにさとりをひらき
たまひたるたいしせんたく
のかきをきたまひたるほう
」 (四ウ)

もんすこしもたかはすと申
たりゐんをはしめまいらせ
てきんちうの人々みゝをお
とろかししたをふらすと
いふ事なし」 (五オ)

〔繪〕 (五ウ)

まことに此女はうのくちのきゝ
やうへんせつとゝこほりなき
はたゝ物にあらずなをも物
をいはせてきこしめし候はん
とおほしめしかねておほせあ

るやうは女はうのかくのことく
ちゑさいかくある事むかし
もいまも見すきかざるあひ
たほらんとふるなのけけん
とも申へしりう女のさいたん
とこそおほえ候へせけんにふ
しんなる事おほく候なかに天
に川ににたる物の候をわかつて
にはあまのかはとなつけて候
まことにそらに川のなかれ候
へきかと御たつねありけるに
」 (六オ)

申やうしやうけうのおもてに
めいゝと候へはいかてかしろし
めされ候へきこれはたゝ御物
わらひとこそおほえ候へとも
くしやとうの心はたいしやくの
のりたまふ大さうのいきとこ
そ見えて候へわたくしのれう
けんには一さいの物にかならず
そのせいと申ものゝ候あひた
くものせいとこそおほえ候へその
ゆへはくもといふは天地のいき也
日のでるときはあまの川きえ

あめのふるときはあまの川
ますくもねつしてあつきと
きはくたらずくもはれて雨
なきゆへしかるあひた一さいく」(六ウ)

もりの中にはあまの川をもつ
てせいとして候と申けりこ
れにつけておほせあるやうあ
まの川をくものせいと申れう
けんおもしろく候一さいのものゝ
せいと申物候はゝしやうわう
しやくひやくのれんけの中に
はいつれをせいとすへきやと
とひたまへはしやうれんけをもつ
てせいとして候と申又一さい
の山はやしにしやうするところ
の草木のなかの花にはいつれ
をせいとし候へきとはせたまへ
は花の中にはしゆまなけをもつ
てせいとし候又ちんかうひやく
たんだりうなふかうとうの中」(七オ)

にはいつれをせいとし候へきと
おほせければかうの中には牛ゴ

頭カせんたんをもつてせいとし候
又一さいのたまの中にはいつれの
たまにて候やおほせければ
たまの中にはよいほうしゆ
をもつてせいとし候又もろく
の山の中にはしゆみせんをもつ
てせいと申又こんごんどうてつ
の中にはいつれをもつてせい
とし候やこんかうをもつてせ
いとし候又もろくのりうわう
の中にはとありければしや
かつらりうわうをせいとし候
又よろつのけた物の中にはと
ありければしゝわうをもつて」(七ウ)

せいとし候又よろつのでうる
ひの中にはとありければ
こんしてうをもつてせいとし候
又もろくのせん人の中には
とありければしやくそんを
もつてせいとす又もろくの
あく人の中にはとありけれ
はまけいしゆらてんをもつて
せいとすをよそ一をとへは十

をこたへあさきよりふかき
にいたりなに事をとひたまへ
ともしらすといふ事さらに
なしまことにこれはこんしや
のけけんかとおほしめし御心も
うちとけかたくおほしめしけり
一たひゑめは百のこひありせいし」 (八才)

のかんしよくはいまこゝにありと
御あひねんふかゝりしあひたす
のまま御そはをはなれたまはず
うへにはけしやうのまへとなつけ
させたまへとも御きしよくはひ
とへにようこのことしある
ときなか月廿日あまりのころ
秋のなこりをおしみたまふせう
かてんにしてしいかくわんけんの
ありける御あそひにあんのけ
しやうのまへを御そはにをき
たまひてみすの内におはし
けるに」 (八ウ)

「絵」 (九才)

おりふしあらしはけしくし
て火をふきけすところに
御そはにみたるけしやうのまへ
の身よりひかりをはなちて
んちうをかゝやかすこれはい
かなるてんへんかとおじんくきやう
あやしみをなし四はうを見め
くらしけるところにみすのう
ちよりいつるところのひかり
あたかもあさ日のひかりにこと
ならずにはかにくわんけんをさ
しをきひかりのあやしきを
そふもんせんとするところに
おほせいたさるゝやうあらふし
きやこれにおはします女はう
の身よりひかりをはなち候」 (九ウ)

そやしよほうにつうたつして
せけんしゆつせのことはりかゝみ
にかくることく身よりにほひ
をいたしちんたらんしやのに
ほひてんせつたる事こそ此ほ
とふしきの中のふしきなれと
おもひつるにあまつさへいまひ

かりをはなちたまふ事こん
しやにあらすしつしやにあらす
これはひとへにふつほきつ
きやうかいなりかせうそんしや
のいんぬの事をきくにきは
めてとほしき女にておはし
けるかこかね一りやうをもつて
身つからしゆようけすはくし
にあつらへてはくとなしふる」
(十才)

きたうの中に御おもてのはけ
たまへるほとけおはしましける
をさいしきさせたまひてひん
ほうのこういんとさんけして
はくしとともにふつたうなら
んとちきりたるかそのうち
九十一こうかあひたうまるゝた
ひことに身よりこんしきの
ひかりをはなちつゝあにほとけ
のたい一のてしとなりかせう
そんしやといはれたまひしとき
もむかしふるきをすところ
のゑんくちす身こんしき
にしてひかりをはなつのみな

らすによらいのしよほうを
つたへたい一の御てしとなり給ひ
」(十ウ)

けりいま此女はうのないてんけ
てんにくからすさいかく人にす
くるゝのみならず身よりひ
かりをはなちにほひをいたし
たまへはせんしやうにいかなる
せんこんをうへかやうのくとくを
しゆしたまひてありけんとか
まりにふしきにおほえ候こ
れはひとへに人にしゆんすへ
からすにくしんのたいしとお
ほしめしてついでをもつてふ
しんの事あらはとひたて
まつるへしとてみすをうち
あけたまひければ廿日あまり
のよひのやみなれともなをく
あきらかなり此ほとはけしやう」
(十一才)

のまへと申つれともいまのひ
かりによそへてなをたまものまへ
と申へしかやうのありかたきこん
けの人にわくわうとうちん

としていつれのふつほさつな
れども人りにましはりおは
しますときはそのもしをよ
ふならひの候あひたたまもの
まへと申へしとおほせあり
ける何事もすきぬれはその
いもかろくなりそのけうもお
とるかや此ひかりをはなちし
よりすこしおそろしきとお
ほしめし御そはにゐたれとも
日ころのことくにはおほしめさ
すくわんけんの御さしきの事なれば」(十一ウ)

何事もふしんの事あらはたつ
ねよとの御きしよくにてあり
けるあひたいまたさにゐたり
けるてん上人すゝみいてゝ申
されけるはくわんけんはかたのこ
とくくてんつかまつり候へとも
いまた五いと申事あきら
かならずをよそくわんけんと
申は五いんをもつてときのでう
しをあきらかにしてこそその
けうもいてきそのかんをももよ

ほす事にて候へ五いんくらく
はしたてまつるところのくわん
けんさためててうしにはつれ
候はん五いんのおこりやういかに
してかあきらめ候へきとひ」(十二オ)

たまふにこたふるやう五いんと申
は五さうよりいつるいきのね五
なり又五さうよりいつるいき
のいる五しきのくものことしひゝ
きに五さうのこゑをつかさとる
此五さうのこゑわかつて六てうし
となるりよりつの二なるへし
りよのこゑよろこひのこゑ
なりりつのこゑはかなしみのこ
ゑなりしかるあひたさうてう
わうしき一こつてう此三のこゑ
りよのこゑなりひやうてう
はんしきてうの二のこゑはりつ
のこゑなり次にむてうはりよ
のこゑとしゆんしなからしかも
さうてうわうしきてう一こつ」(十二ウ)

てう三てうしにたかへるゆへに

むてうとなつくこれりよのこ
ゑなからすこしりつのごゑをか
ねたるなりかるかゆへに一かう
りよのごゑにて三てうしに
はにたる也をよそ一くのてう
しかうをつの二のごゑはかみ
のごゑ也かやうに心えて六
てうしをはさくるへしと申
さつくるに又とうやうはそうわう
の一の三てうしをはいかなれは
かなしみのごゑとなつけりつ
のごゑとさため候やらんと申され
けるにこたふるやう人けんはくと
らくとあひならひてさかりなる
物かならずをとろへしやう」(十三才)

ある物はかならずめつするならひ
いつるいきは入いきをまたす入
いきはいつるいきをまたさるあ
ひた此五てうしきは五さうより
いつるいきのごゑをもつてむし
やうのしふんにあらはるゝ物也わう
しきてうはしんのさうよりいつる
いきのごゑ此さうのごゑはをつ

のごゑにかへる也そのゆへはかう
のごゑたかくあるときはひの
さうつちのごゑにしゆんし
かうのごゑ乙のごゑにひゝ
くときはひのさうかねのごゑ
におなしかるかゆへにつちのい
ろをもつてわうとなつかけかね
のごゑをもつてしきとなつく」(十三ウ)

へし又一こつてうはひのさうよ
りいつるいきのごゑ也此わう
はつちにつかさとりて五きやう
の中には四きにつうしてわう
となるゆへに乙をとなつくその
とく大きにして四方をかねた
るゆへに一となつく又ひやうてう
ははいのさうよりいつるいきの
ごゑ也此わうはかねにつかさ
とるかねはにしをきるとくを
そなふるゆへにまさしきりつ
のごゑをそなふるひやうてうと
なつく又はんしきてうしんの
さうよりいつるいきのごゑ也
此さうは水につかさとるしかるに

たまはみつのせい也水はわたた
」 (十四才)

るをもつてのふとす川といふ
はみつのみち也まかれるをもつ
てならひとするゆへにはんと
いふもしはわたかまるとよみたま
のていになすらへてしきと
いふ字はわたかまるとよみこれも
水のみちにしゆんすこれをもつ
てはんしきてうとはみつの
とくをあらはすななり又さう
てうはかんのさうのいきのこゑ
也此さうは木につかさとする木は
ひかしのかた春にあらはす一さい
の草木みなおひいつるおり
ふし也一さいの草木天より
たねをくたしいんやうさう
おうのときにしやうする也しか
」 (十四ウ)

るに天地の二はちゝとはゝとの
ことし草木は子のことしこれに
よつてさうてうはうへのむてう
をちゝとし下のむてうをはゝ
としてしやうするこゑなりされ

はさうてうといふ字はならへと
とのふるとよむ也上のむてう
のりよをほんとしてりつの
こゑをかねたるあひた此こゑは
天にしゆんす天上にはたのしみ
おほしりよのこゑをはちゝと
たとへてしうとなつたのし
みをあたふるきなり下のむ
てうはりつをほんとしてりよ
をかねたるこゑ也これは地に
たとへつちの下にはくるしみ
」 (十五才)

おほしされはりつといふはゝに
たとへてひもとなつたりひと
はくるしみをぬく心也されはさう
てうは上下のむてうを父母と
してしやうしたるこゑ也これ
をもつて地水火風の四たいの風
ふけは風にふかれて五さうのい
きをしねんに六てうしとな
るこれに又ふかき心ありわれら
しゆじやうといふは常住あめつの
四相をくそくしたるあひたよろ
こひとかなしみと二つのこゑあ

りまつさうてうは木のこゑ也

木はひかしの性につく一さいの物
のしやうするをもつてよろこひ
とすわうしきてうはひのこゑ也

「(十五ウ)

火はみなみの性につく何にても
ときおりふしにさかりなるを

よろこひとす一こつてうは土の
こゑ也つちはいつまでもおとろ
かる事なし此火によるこひと

す此三てうはよろこひのこゑと
申也かくのことくあるゆへなり
又ひやうてうかなしみのこゑと

なつてりつのこゑにさたむる
なりひやうてうはかねのこゑなり
そのいはれはにしのかたは秋にあ

たる秋は一さい草木みないろつく
金色になるをはいのさうとな
つけてめつすへきをかねてあら

はるゝをはいのさうと申なり
しやうちうぬめつの四さうよの

「(十六オ)

中のしよほうにみなあらはるゝ事
也あきらかなり又人の身につい

てはいかやうに心うへきやこたふ

此四さうを人の身にあらはさは
人はむまれて一さいより二十
のゝちは住けしきさかりに身

のちからもつよければよろこ
ひの心もさかんなり四十より
のちはいさうなりかみもしろくか

ほもかしけちからすかたもおとろへ
五十にあまり六十にをよへり
かしらの雪もつもりまゆにしも

をそへ秋のいろあらはるゝもろ
くゝのさうもくのはこのみつく
るめつさうとなつくいのちはや

きはまりぬれはりやうかんに

「(十六ウ)

なみたをうかむこれはふゆの水

のさうと此四さうを人の身
によすれは一このうちに四さう
ありこれをとしによすれは一

ねんのうちに四相あり是を
月によすれは卅日のうちに

四さうありこれを日によすれは
十二時^じのうちに四さうあり
これをつゝむれはいて入いき

に四相あり此ゆへに六てうし
時々じぎにかはりくらくとしくははる
これによりてしやうけうの中
にはねんくしやうめつのほうもん
をときしやうしのむしやうを
しらむると申御さにつらなる
しよきやう大しんみな一とうに」
(十七才)

かんるいをなかせたまふそのうち
ことのやくにまいりたる人のとひ
たまふやうことをはをよそな
らひつたへて候へともいかなる人
のつくりはしめいかなる人のたん
しはしめて候やらんそのみなもと
をしらす候ととひけるにこたふる
やうふくきしのつくりし也なか
さ三しやく六寸は一年三百六十日
にかたとる周の書しよにいはいくふん
わう琴こんをたのみたんして一の
おをくわへたりこれを文ぶん絃けんと
なつくそのうちふわう一の絃けんを
くはふこれをふけんとなつくかのふく
きしの五絃ごけんに二くはふれは七絃しちけん也
これをなつて宮商角徵羽文武」
(十七ウ)

といふ也かやうにこたへけり又よこ
ふえのやくにまいりたる人のとひ
たまふやうよこふえはととひた
まへははゆふといひし人つくりそ
めたりあるいけのほとりをゆき
けるにみつの中に龍りゆうの吟ぎんする
こゑをきゝてあまりにおもし
ろきになをきかんとおもひたち
やすらひけれとも龍りゆうやかて天に
のほるそのとき竹をゑりて
これをふくすこしも龍のこゑ
にたかはすてきといひし人七さい
にてくらゐにつく天下ことのほか
かんはちなりわうこれをなけ
きたまふほとにゆめのうちに二つ
のふえをまふけたりわうゆめ」
(十八才)

さめてのちうてきといふふえ
をとりてふけはそらはれての
ひたるかことしとこたへけり又笙しやう
のやくをつとむる人のとひたま
ふはすこしもあんしたるけし
きもなくしやうせうといふ伏羲ふくぎ

氏のいもうとに女媧氏といひ

し人のつくる也かのちよこしこ

しよいかみは女也こしより下は

蛇なりしやうをつくりてふきしかは

六月も霜ふる事おひたゝしし

やうをつくりふきしかはうくひす

のきたつてかけりまふ又ひはい

かなる人のつくりたるやとへは

ひははふくきしつくりたまふと

こたふ又つゝみはいかなる人のつ

「(十八ウ)

くりはしめて候そととひたまへは

しんほつこうといひし人のつく

りはしめて候そのゝちほうわう

さんといふ山ありいしのつゝみあ

りかのつゝみのなるときはそら

かきくもりかならずあめふると

こたへけり又かねはいかなる人の

つくりはしめて候そととへはふし

といふ人のゐはしめて候豊山

といふ山に候かねは秋の霜のふ

り候ときかならずなり候と

こたへける又しをつくりたまふ御さ

しきにて詩はいかなる人のつ

くりはしめて候やらん詩はりゝ

ようといふ人のつくりそめて候

又すゝり筆墨はいかなる人か」(十九才)

しそめ候やすゝりはしろかつくりは

しめて候筆はもうてんかつくる

すみはたとつと申物かつくるかみ

はいかにととへはかみはさいりんか

つくりはしめて候あふき又くるま

又碁などはけうわうのつくりはし

めて候又ふねはくわうていのつくり

はしめて候又すぐ六はととへはすぐ

六はしけむと申物かつくりはし

めて候又ゆみやまりかふりはいつ

よりはしまりて候やらんくわう

みのつくりはしめて候よろひは

ととへはしゆうかつくりはしめて

候又五こくのたくひはととへはしん

のふしのつくりはしめて候井を

ほる事ははくゑきかほりはしめて」(十九ウ)

候又寺をたてみやをつくりたる

こんけんはととへはかんのめいてい

のときよりつくりはしめて候

そふしてないてんけてんせかい七
たんの事もろくの人たちの
心をあはせてとひたまふに一つと
してしらすといふ事なしみな
くこたへけるほとにゐんをはし
めまいらせてをのくしたをそ
まきたまふ」(二十才)

【上巻了】

- (あまの ひろみ・九州産業大学非常勤講師)
(からしま まさお・本学大学院教授)
(かわち みか・岡山県玉野市役所職員)
(さかもと のぶゆき・京都女子大学教授)
(みやざき ゆうこ・九州産業大学講師)
(もり さとこ・九州産業大学講師)
(りょう たん・本学大学院博士後期課程)